

◆書評◆

齋藤美奈子著

『挑発する少女小説』

(河出書房新社 2021年 ISBN 978-4-309-63134-9 860円+税)



河野 真太郎

(専修大学 国際コミュニケーション学部)

私は本書の理想的な書評者でないのはもちろん、理想的な読者でさえないかもしれない。というのも、「少女小説」を読んで育つという経験を私はしていないからである。『小公女』『若草物語』『ハイジ』『赤毛のアン』『あしながおじさん』など、少年少女向け文学全集には必ず入っている定番の少女小説は、読みはしたもののそれほどインパクトを受けず、私は同じ全集に入っていた『宝島』『十五少年漂流記』『失われた世界』といった、いかにも男の子な物語をくり返し読んで育った。読書とジェンダー化について考えざるを得ない(これについては、「おわりに」でちゃんと「残念だったね」(267頁)と書いてある)。

ただし、前言を翻すようではあるが、本書『挑発する少女小説』は、子供時代にこれらの小説に親しんだ人も、そうでない人も十分に楽しんで読めるように書かれている。職人芸とも言うべき齋藤のエンターテインینگな語り口に負うところもあるが、本書が取る「批評」の方法が、ある

種の創造的再構築とでも言えるものだからである。

言い方を換えると、9章からなる本書は、それぞれの章で扱われる9作品の小説の要約といえる。それはこの書物が「批評」になっていないという意味ではまったくない。むしろ、本書は要約というものが本源的に批評行為であり得るし、意図せずとも批評行為なのだ、ということを示しているだろう。

何にせよ、本書は私のような想定外の読者も置き去りにすることがなく、それぞれの小説世界を、齋藤の現代的なフェミニズム批評の視点から追体験させてくれる。これらの古く懐かしい小説たちは、齋藤の語り口の中で、その古典性を失うことなく新たに現代的な姿を現す。

その現代的な姿とは何か。そのことは、冒頭の「はじめに」で宣言されている。

本書で扱う少女小説[は]、現実の社会に生きる一〇歳未満、ないし一〇

代の少女が主人公のリアリズム小説です。したがって『不思議の国のアリス』も『オズの魔法使い』も『モモ』も、主人公は少女ですが、ここでは取り上げません。(3-4頁)

ここで「リアリズム小説」と呼ばれているものの対立項は「おとぎ話」である。したがって、「リアリズム小説」が意味するのは、まずは『不思議の国のアリス』のように現実とは乖離した世界を描くのではなく、現実世界で起きていると想定された出来事を描く小説のことである。

だが、読み進めていくと、この「リアリズム小説」にはそれ以外の広く深い意味があると判明する。本書において「リアリズム」には重要な二つの意味があると思われる。ひとつには、リアリズム小説とは近代社会の産物であり、近代社会とはすなわち資本主義社会であるなら、それは資本主義社会を(少なくともそれを背景とした経験を描くもの)ということである。実際、本書は名作中の名作といえる少女小説をフェミニズム的な観点で読んでいくわけだが、それはつねに資本主義社会を念頭に置いたフェミニズムとなっているのだ。

例えば第一章の『小公女』論は、結末でセーラが階級回復をなし遂げたのに対してベッキーは下女のままであるし、ストリートチルドレンから脱却したアンも下層労働者に留まるという階級格差の側面に注目する。なぜそのような格差が保存されるのか

とえば、ベッキーやアンまで階級上昇をするような物語では「おとぎ話」になってしまう(37頁)からである。階級社会はそのように簡単に転覆できるものではない。

はたまた、第三章の『ハイジ』読解は、ハイジを「出稼ぎ者」と読んだ上で、「出稼ぎ者」的な移動性が資本主義の本質であることを指摘する。鮮やかである。そのような観点からは『ハイジ』は「牧歌的な野生児の物語どころか、……過酷な資本主義社会を健気に生きる子どもたちの物語」(89頁)として読めるのだ。

つまり本書は少女小説を、「おてんば」「みなしご」といった共通項を持つ少女たちの成長を描き、しかも異性愛と結婚という目的地に彼女たちを押し込めようとする力との格闘を描く物語として読むフェミニズム的読解をしつつ——ちなみに、その格闘が表面上は敗北しているように見えても、例えばバーネットの『秘密の花園』の結末の読解のように、その表面の裏側を想像してみせるところが本書の白眉でもあるのだが——、そのような成長と格闘が階級社会や資本主義社会の現実との交渉のもとにあることをもまた決して手放さずに論じるのである。

ここには、第二波フェミニズムの後に第三波、さらには第四波のフェミニズムが起きているとされる中、第二波の中の社会主義フェミニズムが問題としたような資本主義の問題が、別の歴史的文脈の中で重要性を増しているという意識があ

るのだろう。つまり、新自由主義が深化し、階級社会の分断が深刻の度を増している二一世紀という歴史的な文脈である。

さて、「リアリズム」には二つの意味があると述べたが、もうひとつのリアリズムとは、ほぼ「プラグマティズム」と言い換えられるような意味でのリアリズムである。これはすでに紹介した『小公女』の読解に表現されている。そもそも家庭小説としての少女小説には、「良妻賢母の製造装置」(4頁)という保守的側面が抜きがたくあった。言い換えれば、資本主義と家父長制の装置である側面だ。そういった制度から非現実的に逸脱した物語は「おとぎ話」になってしまう。物語が説得力を持つための「リアリズム」の枠組みが存在するのである。

これは、場合によってはマーク・フィッシャーの言う「資本主義リアリズム」として働くだらう。資本主義には外側は存在しないというシニシズムである。

シニシズムとまではいかなくとも、この意味でのリアリズムは本書で論じられる小説が抱え持つポストフェミニズム的な性質という問題を惹起する。つまり、1990年代以降の新たな資本主義(新自由主義)に適応した形のフェミニズムをどう評価するのかという問題だ。

本書ではこの問題は、今使ったような用語法では論じられていない。また、資本主

義／新自由主義の内側か外側か、といった非弁証法的な発想法も取られてはいない。それがよく表現されているのは、『あしながおじさん』におけるジュディの浮ついたように見える結婚の裏側に存在したかもしれない革命的な企図の想像であるし(それによればジュディは制度にどっぷりと浸かることでその内破をめざしている)、さらには『赤毛のアン』における「ふくらんだ袖を肯定する思想」(121頁)だろう。アンが大学進学をあきらめて地元の教師になるという結末はそれこそ(資本主義)リアリズムの要請に従ったものである。それと、斎藤が『赤毛のアン』がガールパワー、ガールカルチャーをキーワードとする第三波フェミニズムを先取りしていた(フェミニンな「ふくらんだ袖」を肯定する)という主張をすることは、平行関係にあるだろう。この第三波とされるフェミニズムは、見方によっては資本主義的な消費やその中で女性性の肯定を特徴とするポストフェミニズムでもある。だが、リアリズムの本当の要請とは、そのような対立のどちらに身を置くかを決断することではなく、その対立の矛盾の中に身を置き続けることであろう。『挑発する少女小説』は、そのような要請に応じることによって、少女小説を単に保守的でも、また単に革命的でもなく、「挑発的」なものとして読むことに成功しているのである。

参考文献

フィッシャー、マーク、セバスチャン・ブロイ&河南瑠莉訳、2018、『資本主義リアリズム』堀之内出版。